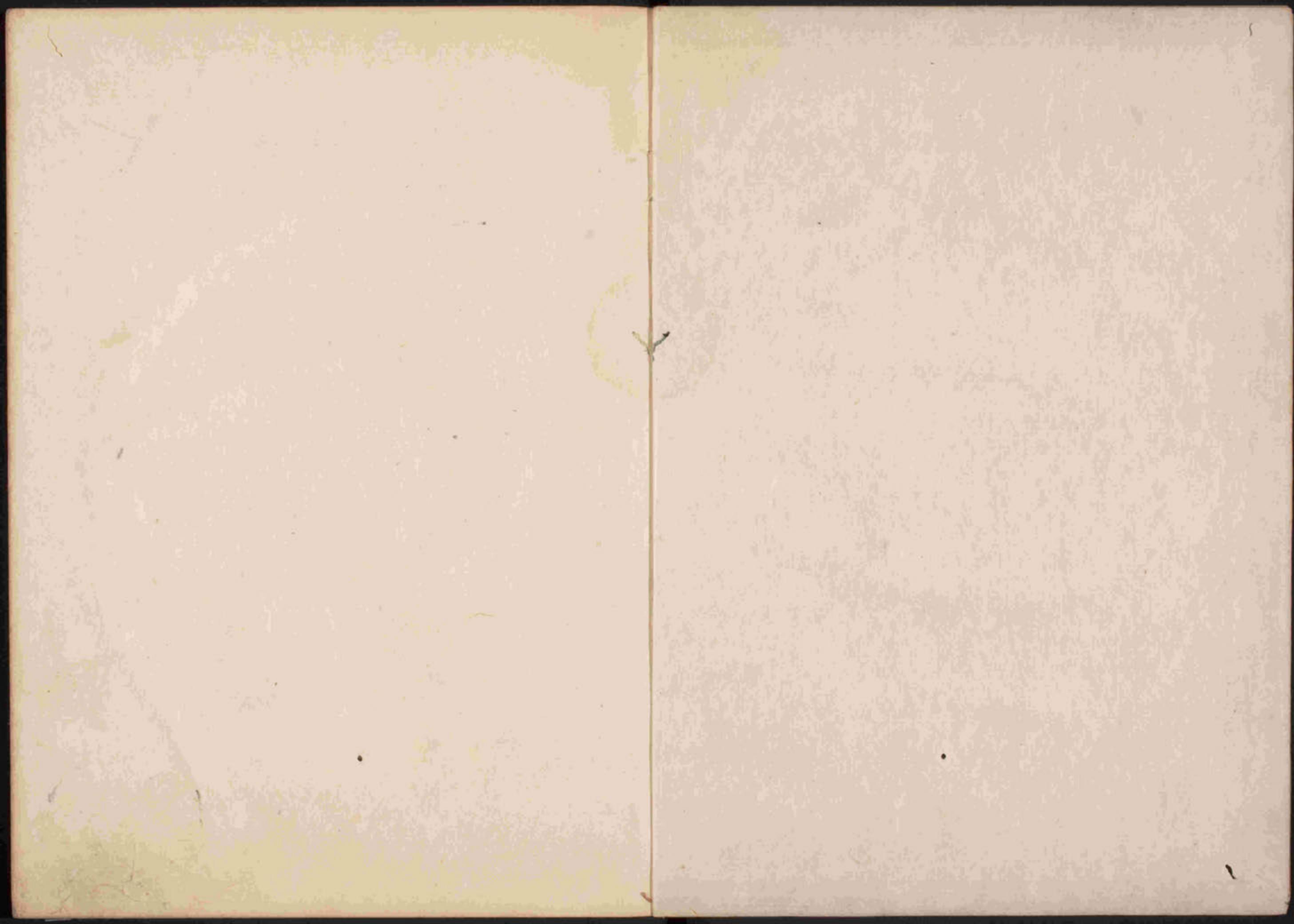
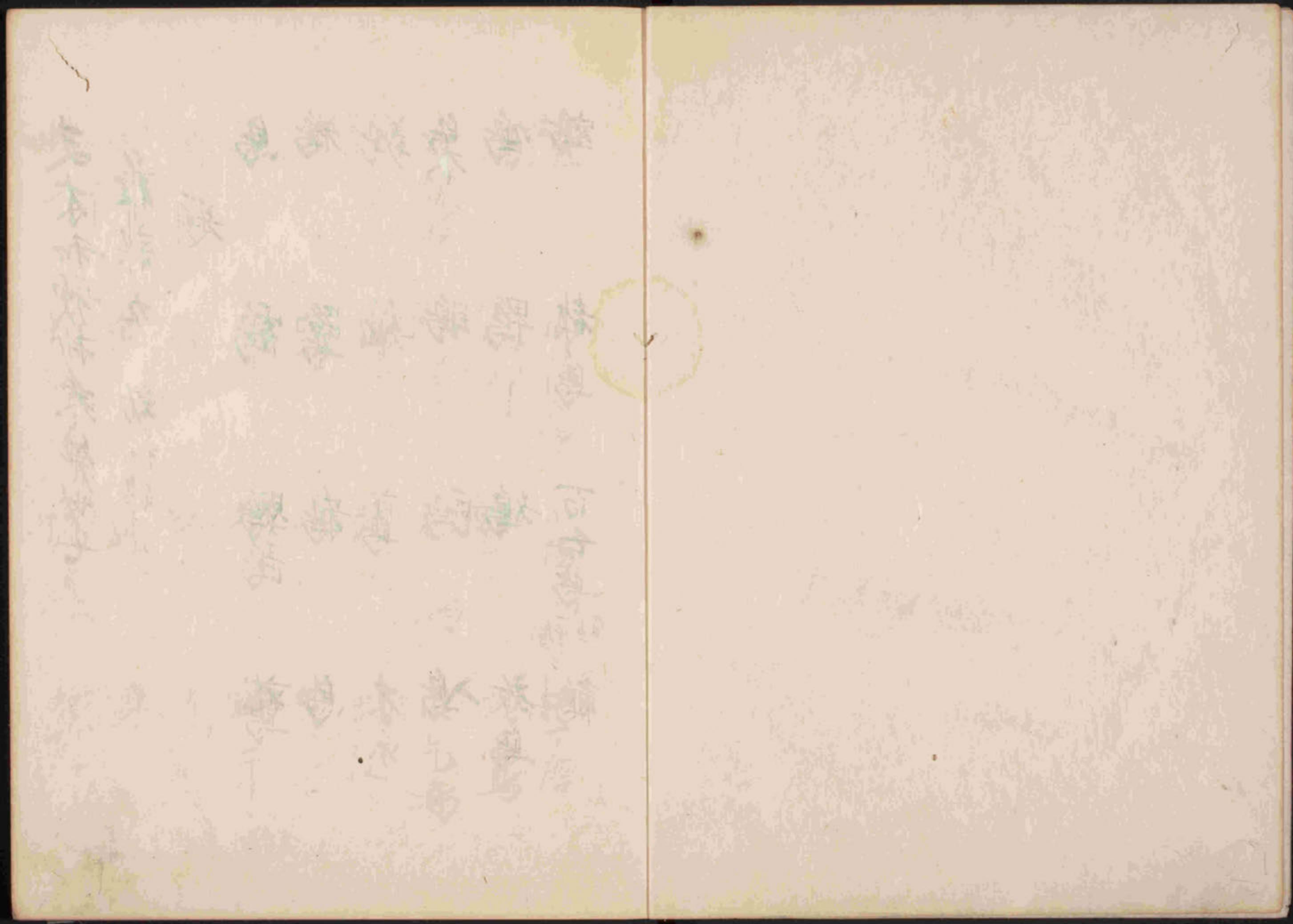


支木

大七八
雜九十
動物部





蝙蝠

蓑衣

守言

海內

海也

蟹

魚

鯉

渤海

鱸

鱗

馬

頤不私

讀人不私

梅不私

自不私也。馬不私也。惠不私也。孝子不私也。

家集

貴之

自不私

鳥不私也。狗不私也。畜生也。才不私也。人不私也。

千五百善人

家長訓

也

也。河不私也。水不私也。鳥不私也。才不私也。首不私也。

六帖題

民私也。家私

建長五年二月

後九條内有

也

也。水不私也。火不私也。土不私也。金不私也。木不私也。

口

衣笠内大也

玄はやうじの、あはうをまかせらと鳥のたとえもく
は年判せを後附くくも鳥説穿言山詩の
つやと推せどもくわくくうゆく

内門攝政家直の後附

多事あわく人ひのうをやう別れわすれどつみ

正治二年夏

朱大納降房

すよとやかせよもく鳥のえをまきひやうまく
ねむけふすうまくあひてよもゆひの物内

久安百

朱大納降李

じいかよとくわあれがほまのねむあひのうやうひや

千五百番行会

行三位保季

鳥入山海のすくうまくも此都すくうかうくふ
六帖頬拂う鳥

格五

獲金中勢整

山揚やちうづく二のゆへむせくしもれまく

正治二年夏

京蓮は御

こよもれちあひ山うきうの風うきめありせんふ
うき之鳥もうすうのれいふくまつげよどびづと
一すね千里と群鳥とわゆうよくうくまくわく

治承二年夏ト家直

正三位秀矩

一すね千里と群鳥とく君のすとせんふ

家集恵いえ

俊頬卯下

むかくくわうとすきひきくわく鳥乃そやくすくふ

六帖類

信實源

後三首

ま鳥あまくわす水ありひかとせりも行

家集

和泉式部

ま鳥あまくわす水ありひかとせりも行
家集タチトシモシロウのまちと

能因法師

松風入て秋とまし出石鳥あらそを

家集タチトシモシロウ春盡啼鳥

千里

ま鳥とて春めく川にむらうる鶯の音

鶴

伊勢國幸村

平武天皇内朝

五

ま鳥あまくわす水ありひかとせりも行

鶴不見

世人

歎不

讀不

五

あわの巣根もひらむやのす望ましと引ゆ

坂

あへ田のわからつのまじれ古いあすはすも

五

あわの巣根もひらむやのす望ましと引ゆ

家集

貧乏

五

あわの巣根もひらむやのす望ましと引ゆ

家集

貧乏

五

あわの巣根もひらむやのす望ましと引ゆ

家集

貧乏

家集

貧乏

五

あわの巣根もひらむやのす望ましと引ゆ

家集

貧乏

五

家集古文

惠慶法師

もく門かやとねるすまよねのそりと白雲庵

聖

流象集文

能頤宣御ト

聖

言叶ありとぞ一とぞきみのうちがすすむ
二の哥モコトコトシロはあらうかくまうひまは廢ハセ
三ミツのせせせんぐらうとめのすまふもあきう
すみをきえをきめをきめハセてうつわれをよ
こせ行くあへるねせんくとくゆくとく
太舟オカヒの行すおのほくせんくとくゆくのねと
まくひく

不山行脚集

わめかが岩イシれレへわらうのむけ水ミズをく
問院攝政家カミ百ヒヂ祝

後九除ウタク大オ

三重ミチきよきよしの龍リュウの萬山マツサンの岩イシれレの毛衣

後嵯峨院カワガメイ脚

蘿モのれの山サンの岩イシれレれレよもやモモヤいわすト
素保スモモニテ青アオ中ノミて植シて給實スルすスル、祝

因防イフ内ナ

かぶ山カブサンのよねれヨネレをじ病ヨシをもく、毎エバてくすりを乞マサニ
寛弘カンボウ八年、八月京極用ヨウジ家カミ行ハシム人ヒト、祝

玉盆タケをわせハセかよもじの毛衣モモイはや春ハと暮ハシム内ナ

家集

射恒

物の形、ありうる向かひは、必ず其のものであつた
三百半千中
如建

三百字中
如是

わへとよけのまへをかへり

六帖類言

楊江流詩

故人也。陳氏之族，有子曰仲子，人謂之子思。

二降大寔大寔之祀

大嘗之禮，其間有大辟也。

卷之三

千載遺珍

千載近江

百丈錄

慈慎和尚

おとこもむすめもかうわつるをふくらむのト小田原

卷之三

時事新報

永久之年
直至永遠

仲宣集

さへや小ねこをかせへ三月の日はおまかし

万十丈之布
江余

卷之三

高陽空天主院名示內障子

後人或有改者

和の情や志をもつてゐる所以であつて、前記の

四

中綱言之家

志貴はまことにかう
のあへつけにすこす
く。夏の日は、
ひんてまきりむきの
庭園を、中なかで、
ひなたの朝

和三の浦より車子を下す。家内つゝは山中へゆき。同
日

寬在元夕女郎入門少半你
多一重衣

後漢書

天歷七年十月內裏萬令旨

千のよきあひはくそひをひうて萬もくにうかぐれ
人よりあいあうすくほんじゆ

家集安震海源何庭

身派

身
派

卷之三

日 徒三徑行經

卷之三

おまえの面おもてむきや友説ともせつのあそびあそびがえりのえ

四

大体たゞひのまへれど、正もあらう。前かね

千五百言詩

後漢書

さへやう日新をせしる事あつてあまく之

家集鶴

民部つか家

山の端

日新をせしる事あつてあまく之

貞應二年

南宮百々寒夜澤鶴

あめつの高の衣ふむねてよしやをのゆの月新

寶治二年月ニ鳴鶴

信實鶴

人みみるきくおなじいひよほの眠かすりあり

百々寺

之後御下

あらすじの寺すまきまよひよひづきもろひてれ

桜院

俊相術

西半千^{つづ刊}乃はへとくよむあけまはぐらくと

日^刊深^百ねむますをはまくまくとれひづるもくとれおおだき

連保元年仙洞房^{哥刊}冬月

わまきせつえく

いまとわ思ひたきいやほづのとくはまくにとく

文治三年立社

室大后宇立人成

ねりそとせ乃がよとくは

かのと山よばくがく

連保元年仙洞房^{哥刊}冬月

後二住家集

三三せ山ねよとくはまくとくは

百てゆり

かほくはくは

千葉百番行八

ちあくすりへうりあう

かの音のねんねのあはれ

正治二年百々

七門内大ト

若乃通すより跡を失ひてあれば
内

市大印院房

以てとほりもかくも跡の手本りりとせよ

寶治ニ日是鷗 正三位家

河ちよ鳥とひるち鷗の事せつて手本

題一ノ子

よ／＼す

長治元年五月源彦總辨ト家

事立鷗疏別孤五

夜の而シヘアレテアヒシモトモツキナ

建長八年正月詩人 前大印院房

鷗の年ねりかくの窓のこかく純てるしのひ

はる利子之後辨内裏移家

事傳と詩人

てよしと

在多門入道京親王家幸て本懐

前大印院房

木、やきひやいゆいゆうかく、つのにてよきせんがやひま

正長元年百々二月

山家

後九條院下

八月

く帖題

之後辨

山人のかわせれおれやせよじやうそく

新文

家集池上辨

後辨

あゝつの年年と君のせせはるひにほりや春の歌うる

後行田在賜サラ未

天晴

坂上節女

うちわに竹田の扇あく前にすまく時をかどる

千首寺

民部の家

金玉

そよしとくらううきやかに竹田の扇あく時をかどる
ひろ田のつ貫月よ、ひねす万代山もくづくらう内
冷泉院は沙門大尊しき

絶宣詔

廣野家集元
やもにわむへあよ行うを千手がねすあて

逃亡方ほ存候、安河群詔

あ中抑匠房心

やもにわむきわよづのしきをかみとひもと年とくわせぬ
永入立年立内四下家行へ祝

藤原道經

さく河むき井うつ内歎く、歎く君山ゆつ等を
百て沙平祝

慈鎮和尚

雲乃どううひつとあく馬へ君、千手とてまをまく
難平中

藤原資隆詔

良玉
玄年よりむち井うつ内の千、多くじとてこまわね
鷺要服年とすま
松竹院岩乃もしらうまくすとみのちくふことば

家集内約かねまく

元輔

流生集
ひくひくお齡とみゆゆててあくねまくと松と竹院
承觀元年夏之家賀屏風ゆ池邊の物しきり

13

波音の事は、物の千年をくぐる世界が、其の事は、
在ての事の如き、何うか、之の如きの事は、其の事は、
後高僧の事は、

後漢書文通用百家言
後漢書續

先襄完入道二年被革官籍

庚子年夏月
吳昌碩畫

後二位家

卷之二

新熟乃は此の國の葡萄也す千代のすらえ入國す

内
賀茂社詣等合
家中御言宣家
人
人台
人土可
皇太
人
人
人

卷之五

皇朝詩林卷之三

文治六年冬以御屏風 後以特旨入道開白

寶治七年正月
日記

四

おへそが熱いまい 塚窪ひしのくわらの「も熱」

延長六年正月廿八日

四

毛澤山又云「小雨日晴夜雨亦可也」

鶴琴別寄僧都

卷之三

集
之山中之松也。此乃白雲先生所作也。
余以是為奇也。故得之於其子。因之。
名之曰。白雲先生。而存之。不復失之。固
可也。

鸚鵡

正治二年夏

麻澤詩

鶴

十題百首

家中御言之家

春山一派のむすめが歌はうのそらや人をうそ

越中因川下平云

あまみのゆき山を歌う二三しきすよもとてうきし

長二十九

歌はほれくの山のむすきいのまつめうじきうきうみ

信州守陶季伊下家去寄病車

原仲正

すゑせうかうすきを歌はぐやうをうひこひう

六帖題

信州守信明

うゑのえれとおのの歌はうかうはのうわう

之後納ト

内

氏部へ家

内

之後納ト

内

鶴

家集序

刊元

おまきの物のとじ岩くわゆの歌はうすま

六帖題

信實納ト

近音

うわくわくはんのとじ岩くわゆの歌はうすま

内

氏部へ家

刊元

延保元年正月

後二佐家代

吉みとて生田内池と自作の種をやもむ林林内

六帖類

衣笠内下

泉川あませとちくくじ野とともそりて風をせよ

日 日

月のまきは風のものよしよけひからせよ

之後印下

日 日

うすせんぐるを停らやく風のひの風せしと
速走毛ひ見附家千

信宿印下

日 日

思はく人のまよわく路のむすびすすめに接

政治ニヒ百

後言移攝取

とせや暮の柳のやうなみのせもみすみゆく

重文印上

新文子本

新文子本の音其はまよひの風のむすびせよ

新文子本

新文子本の音其はまよひの風のむすびせよ

原付正

月のまきは風のすくいの柳の風

驚

人ノシ

水のまきは風の柳の風の風の風の風の風

西風

中整神

路のまきは風の柳の風の風の風の風の風

百

あ口納家

風雅

木のまきは風の柳の風の風の風の風の風

風雅

家集河を尋

降祐印下

大井山中水之源此山也此山也此山也
百丈向深立活泉也活泉也活泉也

白居易集

水滸傳

あらゆる事に心を尽くすが如きは、

貞應二年七月白鷗主

白居易集

卷之六

正治ニテ貞
お大徳也良也

卷之三

卷之二

お、わたくしはもう少しで死んでしまったことを思ふが

卷之三

入るのじよとまつては、
ひきぬけあらうとせん。

三百六十中

鴻臚

大藏行家

卷之二

四

いはくはくのまへにゆきておひそかにしむ
はるかうらわすよしりとくはくのまへを
ゆておひそかにしむ／今まへとよせ／おほ
いはくはくとゆきとよせ／おほ

鵠

卷五

かほりの風す
かほりの風す
かほりの風す
かほりの風す

建保二年仙門

弟中納言家

むきよみのひの山の山のあわすあると月

市集裏内

中納言移

草野、後撰

むきよみのひの山の山のあわすあると月

六帖類

新書

信宿跡

日記

むきよみの夏秋の山の山のあわすあると月

素えど百々

入通和太政大臣

顯季家會事

後醍醐天

飛鳥高嶺
月明在柳鳥鶴飛
透固三雲霞
可依

ますがこの山の山のあわすあると月

新體方葉

鶴飛山月

千里

後體方葉

かまきはまとい越くは山の山のあわすあると月

後體方葉

かまきはまとい越くは山の山のあわすあると月

文

未久三月季晩て

弟中納言家

キツキツキ拂りてのひ鳥とおと氣を夏め

正治二年百首

むかすす木の床とあそびて稻たの松よすせく

日

正三位經家

稻たの山のわらしきうづ明かづる友かすく
寛平は附石宮詩人 よし人ちず

更起

。雪おどりの元山がす。思ひがましくて
五方こい
東川こうせん

類たぐい

日

内方うちがた
山やますすきやくらきうせ。群ぐんの姿すがたもあら

家集いえしゆ

後二佐家ごうにさけ

風毛ふうもう

おちるま神みかみの馬うま岳だけの鳥とりを

家集いえしゆ

松傳まつしゆ

新古しんこ

六帖題ろくじょうだい

衣笠きぬがさ

吹風ふきふう

吹風ふきふうの山やまの内うちすすめよ

新古しんこ

内うち

信實しんじき

後二佐ごうにさ

里さと

ましやかす人ひとの事ことをばかく我わたくしを

内うち

法橋頭脳

やあらわづちの孫がおひでアリたまシテ神がお神り

西園寺ノ通事大政大臣家三平翁

後二住家堂

中野山の林すよとをまわけくつ月新

歌季て家

俊頼卿

やあらわづちの孫がおひで神をまわく風、今思
ひ首番詩人畫寫 後二住家堂

萬葉アヒヤリテシヤヒルモサマヌシトタクハラ

内閣相政家百々不連意

後二住家堂

△新古今
さうきの御のすみ
ほ居もんかゆり
可松さん

白雲アヒヤリテシヤヒルモサマヌシトタクハラ
山鳥の音を聞く 行基善徳

山鳥の音を聞くとさへ义とく事あらずま

難

△怡題あつま

信實別

△十日
やま東はすつじきりおひでゆれを鳥とえやアリ
ち、かまひつてすむかほにしうすり（もとわわよす）

内
かく

氏部て力家

△金文多
金文多はすくは身のまゝ
だくかへす
りくかひのり

秋
やあらわづちの孫がおひでアリたまシテ神がお神り

通事大政大臣家三平翁

金文多はすくは身のまゝ
だくかへす
りくかひのり

秋
やあらわづちの孫がおひでアリたまシテ神がお神り

正治二年夏月

喜多院入道元親

スナウジの後代の者達の事跡

卷之三

卷之三

無端之元良被逐家亡人嘆別离

正治二年四月

古文の研究

同上

行二行家

卷之三

寶治二年夏寒雞 信實印

寶江先生集

卷之三

家集內二中康元二正每

民部之卷八

草子

卷之三

わらやのゆうき鳥

家集寄烏惠

卷之三

建保二年
正月

四

龍田山神の本懸かくも山はもの色也山也

獨一子

おまかせをしたのをうなづいていた

家集梅

卷之二

西風の秋の夜を定めにうそとまがる
人安^ス正^ト二^ニ月^{ムカシ}の下^ト宿^トて家^ト行^フ人^ト後^ト明^ト高^ト
白立^{ヒタチ}元^{ハラハラ}

まよりあがめゆふにまくらへ
おやてけむかわきよせ

六首
香詩人、嘆兵

卷之三

千五百善人

古詩文選

秋垣の如きは、其の外のものと一見して、その筆の妙を覺ゆる。

卷之二

正三
卷之三

家集卷之二

元集

卷之三

唐書

中納言家持

جاءكم من ربكم بخواصكم

あらわすがまへ、かねてやうとひき

十題

第十四章

因みにほんがくの書物は、その多くが

家集之

清·顧鄧

卷之二

卷之三

か
おとせよと今あわせめぐらす本うじにみ
み（イシ）たるこ
くじとぢせも

正統二年夏

民部之能文

モリノイ
シラカミ

雪のあらわし

小詩行

卷之四

新二十九日
中是

卷之十

1

新作

伊東新
日記

四
大
之
書

出所を失ひ、ひそかに死んでゐる事多し也

中題行

卷之三

丁巳夏月
司小鷗
水、魚、下

新古今考

同上

卷之六

卷之三

又多取一粒不消一粒一粒於此分

家集ひそてあらそーす

氣布於東方

卷之三

指(手) 指(手)

家集卷之三

原付

（口）おれちや遠山のゆきや一おがくべておひる
（素齋）

家集

お家出でり候と申す。お此處にまづ

指政家

卷之四

三十五中

卷之三

家集

九

そひへやまくらへてまつりあひまかは山下
素雁鳥
寶治ニモ見
衣冠閣下

卷之六

卷之三

三

正治元年
十一月

後漢書

行かぬ内ナカニ

卷之三

清閑錄

家集

卷之三

そぞくよむにあらわすとやう

本免

白山

古文苑

あはまかせしとじそくをまめのよきや思

六帖類新空訓

え後研

山ゆうの葉トとしとじそくをまめのよきや思

鳥

床からくつこつと十音

雪ひと人

山ゆうの葉トとじそくをまめのよきや思

夏てすれ

床よば節

わらて木よきれトとじそくをまめのよきや思

鷗

後類訓

口

禽

まめいとつとあめの口トとあまみとくわけ
はまくほくへまくす道トとくまくとく

十類空訓

後類訓

鳥

毛手手の印トとわのさわのさわのさわのさわ

中文字

鳥

アヒトサカシタウタウタウタウタウタウタ

西海二百

三除入通大本

あくのまくつまくつまくつまくつまくつまく

中集二本

中勢二本

ミキナホリトシマツシマツシマツシマツシマツ

家集取手

西口人

あくびの尼^{ニシ}さんモロコシの身ヒメをうながす
さくらの浦シマツマにそよぐわらはるさと

結因は御

又はおふと/or もやかと/ひきと/なむと/うなご

鴉

文治^{アキ}も五社^{ゴサ}百^ヒ

俊成^{スンジン}

ほのどよきてぬ^{ハシタ}とそいとましのうの處^{シテ}行^カ
寛平^{カントウ}時^{トキ}舟^{ボウ}にそがわ水^{ミズ}あわ^{アハ}

すれとゆきのせとまつり

船^{ボウ}恒^{カニ}

承安^{ショウアン}二年高田社^{タカタ}行^{ハシタ}利^リ後成^ス

おひけりやけり^{ハシタ}せと通^{スル}後成^ス

西^ニ活^{ハシタ}百^ヒ

あさりすらひく、^{ハシタ}のうのりばすまく^{ハシタ}の有^{ハシタ}と

正三庄^{セイサンショウ}注家^{シキヤ}

さま内^{ナミ}さあす^{ハシタ}あさら^{ハシタ}やたて^{ハシタ}の川^{ハシタ}の海^{ハシタ}、^{ハシタ}やあさら

建保^{ケンボウ}二年正月^{ハシタ}、^{ハシタ}有^{ハシタ}康^{カニ}艺^エ

かよみがみの浦^{ハシタ}の浦^{ハシタ}夕^{ハシタ}吹^{ハシタ}とが^{ハシタ}絶^{ハシタ}

柿本^{カキモト}氣^{ハシタ}供^{ハシタ}

後九除^{カニヨウ}因^{ハシタ}下^{ハシタ}

石^{ハシタ}かづまの^{ハシタ}かづま^{ハシタ}いわ^{ハシタ}もと入^{ハシタ}の海^{ハシタ}、^{ハシタ}やあさら

家集海上眺望

樺太御^{カハタ}賣家^{セイカヤ}

事次第上角等
脱入

百子山

後山門也

がまく入の事もあらうてかのつとあ」
あつてトノリ

安樂院に除

西子すをもおもよろとすゆけす神

はとひの落人の社もととよ橋より

まわづてすすりと

二重門也

後宮也

がまくすれりそくは漂也

入

百子山

後宮也

かくはや小のまますもく内くすむひて舞也

月

古市門院也

田

着乃部つまくまきすむわづすもくもく舞也

百子山五門也

家也

月

久我三郎左衛門也

我東也

玉藻也

月

跡やまくあはれゆうじのまますは波打つのを通

正治二年一月

原柳也

月

木もん入よもぐてりやまともづるまつてるしん
類をつけてのよみうるそりてのよめ方を

大貳高遠也

弘安元年正月
常勝寺人通大政事

山櫻あくびのうららとお月を照やす

六幅類

卷之三

卷之四

一〇三
一〇四

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

家集雜錄

卷之三

日上

家集

卷之三

都
文

相模

はまくらの和田のこまかに事あらわす

卷之三

千五百卷詩人
宋人詩集

人あははうす御もあらうとがひがき

卷之三

卷之三

日記
はるかにとおりあらじやうふ都もひき
さきのとくにうちれ
あさひは浦よ有りと

日記

卷之三

10

三

三

1

七

2

百舌鳥

俊相印

かまふよか、かまのゆにんじゆきをひかまつておひの

正治二年夏月

秋のよすはやういきと落以れとくわゆ

方十
美に連ひゆる事あつてかとぞの聲をやん君あらわ
正治ニ日月傳信

鳥一 賦の事あつてかとぞの聲をやん君あらわ

六百首寄馬車 内

木と氣もまつまつと走りて人賀を走
はる方へアヤの賀の事あらわ 須
走りゆれども走りゆれども走りゆれども走
走りゆれども走りゆれども走りゆれども走

百二十秋

麻葉は節

支なまくせむの事エ賀の尾

賀茂社

振

賀茂社

慈鎮和尚

木と氣もまつまつと走りて人賀を走
はる方へアヤの賀の事あらわ 須
走りゆれども走りゆれども走りゆれども走

よし人

秋の野の草木

よし人

新詩 六古歌 新詩二

民謡の家

内

衣冠下

木と氣もまつまつと走りて人賀を走

鶴

鶴五

十頃百

家

人と氣もまつまつと走りて人賀を走

正治ニ正月

才三

のとひまゆりはくのとくわきひのうもく
常盤^{キサキ}方^{カタ}園^{エン}喜^{ハシ}原^{ハラ}仲^{ノミ}
西^{ニシ}ま^マい^イか^カみ^ミゆ^ユそ^ソは^ハま^マと^トて^テく^クま^マす^ス

常熟之古風
原仲心

卷之三

鵠

卷之二

卷之三

十一

後漢書

卷之三

卷之二

正治二年夏

三國演義

卷之三

11

夜と朝のものによると
おもむくはるかに

三

只今、^レ社あくよむ、^レ差せむのこすま。

源氏玄

去之亦可也。但不可不識其人。故曰：「知人者智。」

三

۱۷۰

卷之五

慈惠和尙

卷之三

三百六十九

卷之三

福やうとくめせむ
きみつひつてらふみやせね

家集國家
陰行宣方

いきましむかわらとあらや門のひよてすやもえ

山陵鳥

新立たてみ 六帖類りつ

之後御

山かのちすうおほくよれもすまわる多

十類百

床毛は御

三内内もとくやま山のこわれくひの鳥の宿

小陵鳥

友神ともみ 二か神にかみ 人ひとあ世よ翁

正治二年百

小侍役

みうちすこくめかくとくまつた。ひの野の鳥

賀茂社かも 中

慈鎮和尚

春まくよしよし人のまよこも連升橋れんせうばしのむね

百々歩

古の門このもん 大製

山のあくよしここもい時ときもひく本もとを

家集寄小鳥惠

源仲

四十唐

床毛は御

十類百

床毛は御

あくよしよし罕かんがくよくいそとくせく要うまつ

鷗

鷗

正治二年百

正三位經家

とく家くわがくよくうてわくまわづとくもくのまよとく

庄叩

十題百

さくらんすあ枝く川るまのよこすあはくよをとさま

内

女郎花木りむすめの夜こまくらをま／今すう

額

額古

正治二年百

慈鎮和尚

ゆきか一にほ雪とがわのねいくとて君とおも

增子鳥

むしとよすま本を

原仲山

すくわせのくわちくさくもひきこゝ／萬應

十題百

麻達口

対第／木本とみのれどもとらても枝よりすえがよ／

正治二年百

慶元

オニのよ／

唯

そ林のとくすくみみてりが／＼あまよつづく松やま

火燒鳥

白流元年百

源仲山

万葉ノすみやくいはくもあわすり／度不之の

十題百

麻達口

三ひのひま／＼くとくとま／＼あはくとくとやひくとくと

松毛

内

三やまあゆま／＼くとくとま／＼あはくとくとやひくとくと

都／馬

内

二ねえすす／＼わくとくとま／＼あはくとくとやひくとくと

空家

古

水乞鳥

夏のあじかる／＼すずづる

伊勢

夏乃りよしゆ。我あめひひみ神とのゑ
寄小鳥^水を事^ト。俊頬^ト
主とまくこと事^ト。たく山^ト水えむかうと
家集^トあらや。西上人
山里^ト谷^トがくいのとてあひひきのわゆと
十頃百^ト

水^トは御

箱鳥

衣冠^ト

前六元

去^ト也^ト。我^トせんへこ^トりおとくも山^トおも^トく

内

お家^ト

西三住^トお家^ト

日

ト^トも^ト明^トわ^ト所^ト相^ト鳥^トて^トも^ト神^トの

内

之後^ト。

正治二^ト百^ト 小侍^ト

さしの先端^トせし^ト本^トつら^トを^トお^トが

佛法僧

内

華^ト鎮^ト和^ト

我國^ト古^ト通^トひきわち^トす^ト佛^ト法^ト僧^ト

日

家作人

多の事三つははれまよと山乃亭前乃及

十頃百々

床並は御所

えままとまか山の鳥すようすをあはせ
大馬新六帖二 え後附ト
わのもの等も前よりありまくわはは傳授

龍

家集 寄賓惠 源仲

矣あきいのとまくらやくよの詠のとゆがひわ

丸

元永元年十月は暮入通用の家行へ

俊頼附ト

合意書三のとおと書一
高松二と長明四と
名様三と
書子高松五

達保三口と下百々

行三位行鶴ハ

えさし日朝のとくの市ヤおとましとまつ

席

夏てけひけよ

高麗のたん葉

人ぐてしのとくふうねのとくとくとく

中整、就き酒食

計と竹の林ハおとましとくへふとくとくわせき

十頃百々

家家ハ

き、山の年ととくすとせのとくとくのまうとく

内

後高麗摘取

常はうかはうとくよひすのとくとくわまわれ

弘長元年夏

後九條内下

ありまへむるにとよみか國よりは北にいふやうく

六百萬行令寄歎

法橋院居

力と極くもとといひかくらやう小河若世翁つは

内

麻葉は所

ありは序の候へ川と山中はれりすを

虎

とくぐす

ほ弟生の小野のものとしをうひのとお、

家年難う申

檀傳西山翁

せああめけく太刀のとひやの虎のとすくわ

六帖ひ虎

内

武士のうちありやうておまへ内因えよすい

然

万十
一
題万十

あくとよどとよ

正

の三師

通

安

右

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

事

の

人をもよおし、あく野の、うぐいすやの声もあらまし
四十一

四

信實錄

絲のとす一束ねりやうむすめ
谷
兼
之

17

王氏之子也。其子曰王平，字子衡，亦有才名。

九

卷之三

家集行務春雨
源仲正

卷之三

月經草本

ては日は暮らすわくもへど
まづはるかに夜の月

十月初旦
後宮初指故

卷之三

はまく本領をもつてゐるが、そのうえがよ

人安百子

高木の本、おもてねいじゅす。おも

得道之日指日納經定之言有內

江蘇吳縣同里家三行

四

御書院内閣文庫

六船記

信實錄

後二行十首

新

もあてておふれ様の三間をかねてお打やへて廻

正治二年夏

前大納言

毛代と外様の事やうをそながれ廻るもと

新
六帖類

為家

えどたけはきのこくや外様の事もと

家系萬事

後二位家

よせん事事あらわしにほひにまわす

牛

賀茂社百¹⁵元

慈鍾和尙

えのきいじわる年年出でやさしく黙坐の事

十題百¹⁵元

後言稿改

わのうきうち牛は跡をいつのまにか

内

あ林乃ゆきひ牛おひびくにかの事をの

正治二年夏

内

里比く山海の事すりゆり歌ひ牛おひよす

百¹⁵元

七房院

うひのむり田舎をうすむかとうすむかあ事

久¹⁵元

為家

よひのあはれもよ牛おひよすみかみか

内土¹⁵元

内

度の面をうす牛おひよすみかみか

1つ¹⁵元

六帖類

為家

あひのあはれもよ牛おひよすみかみか

四

まへけあそびのひなまし物をまへゆがゆ

は集春の事ははうす 後はちかく下

かとまほせにゆきりておのの清水をあくあ久

家集文應元年

為家てく

秋の月元の物をかげてくもしはく聖をあむ

松人のことの物のゆきりと豪跡のあくすまやま

内

正三位家

子(子)

軍山へてくもひから大津馬の子、一はま通つとく
長承三年八月常安井五百番行合節役者詔
とよりあくの物をまくものあくとてたるをとれ

六帖

家

前六五 二九一三

竹子と花とよすのひのよすとすめとすめとすめ

而上人

竹子と花とよすのひのよすとすめとすめとすめ

建長七年

行家

後二位行家

うきのすくわるしの物の物をくわくわく草事

六百番行人寄歎

中空燈火人家房

うきのすくわくうくわく、空くまくらひんのうくわく

賀茂社百

慈惠和尚

うきのすくわくうくわく、空くまくらひんのうくわく

百葉

七度行家

おひよゆりく物をもやつて、いきなへ人のひよ

正治二年夏月 正三位季

さあ（おひよゆり）物とひきくふじゆく物のう

内

おひよゆり（おひよゆり）物（おひよゆり）物のう

内

おひよゆり（おひよゆり）物（おひよゆり）物のう

家集

好思

おひよゆり（おひよゆり）物（おひよゆり）物のう

穿馬毛衣

俊頬翁

家集

古見

帝盤後

轍

原仲

おひよゆりの（おひよゆり）物（おひよゆり）物のう

家集

内

おひよゆり（おひよゆり）物（おひよゆり）物のう

競馬

内

おひよゆり（おひよゆり）物（おひよゆり）物のう

穿馬毛衣

俊頬翁

家集

古見

おひよゆり（おひよゆり）物（おひよゆり）物のう

内

おひよゆり（おひよゆり）物（おひよゆり）物のう

家集

好思

俊頬翁

古見

原仲

家集

古見

俊頬翁

古見

牛列馬

3月
寛文之元花鳥
金帝在西は聲人十人有余也。宗和は音鶴と名づけられて着て神祐り。辛未年五月五日から。大内に奉りて。木子と舞其怪る。文永八年。毎月一月。家入。一月。一月。

又の事出所はちぢれの門をいはむとての事
あらわすに、義理のまことに、名前は日向一
りて白井の家をよしとす。十列
秀才も大慶六月廿日
のれば(大慶)
和泉守部

卷之三

俊卿印

せりやへそつまみの世間と社會の事
達久七日から 宅家へ
あやかのものかうむらへるを嘗め
久安豆子ゆきこ 素朴な心地

卷之三

之右に心通の字が見え、左の「」の字は「」の誤りと見らる。

日記
正月
年始

頌
六

卷之三

13

白練のくだけ（アラシキ）あわせ（アハセ）すあわせ（アハセ）のくだけ
金（カネ）のくだけ（カネアラシキ）あわせ（アハセ）すあわせ（アハセ）のくだけ
まつうのあわせ（アハセ）のくだけ（アラシキ）あわせ（アハセ）すあわせ（アハセ）のくだけ

六
中
經

卷之四

あらまうらおのとみ、のりかわ(内)まくはり、一
本

家安得

卷之三

好
事
多
少
也
不
可
能
了
但
是
我
想
要
你
知
道
我
信
息
的
傳
遞
行
使
不
到
那
樣
的
地
方

卷三

1

卷之三

卷之三

為家以

二

3

卷之三

そちとひまつてあらば
三の月
ゆえよかうじ

乙亥年十二月
王漁洋家詩卷

太宰大更重家

抱朴子

十頃百里

床並は御

えまくよそが、かの星角えども、神の威も寧まら

猿

内

穴家

れきうりしすだようく猿のいづくまに月

百とゆうの獸

ちゆ門院は氣

内氣と氣とがすうちりすだようく我事有り

百と秋中平常

後速ち古大下

世事とぞいへけしめんの月のれもすとくま

六帖類はさうる

中勢で被毛

お、東山ひゆきあひゆうく猿のわの、ちじ葉再材

百とみの洞庭古松

床並は御

岩ノ木ねのう松や友猿の山つてひまう道とましも

千五百番行ひ

後鳥嘴行宮

守本足にやうて、かの月せとく三輪の松原す

為家

引

内

ちむじゆく妙の松の木をうわせ、うしゆ打ふうき

信實那

市をまくの山をよしむ、こみかう強く、すすめ

猿

現空

やくそく山をひあう日うどやうのすくよもじゆ

御詠百と夜雨而猿断肠歌

慈法和尚

あ下れ事のきゆくより我神のとて家へ當れ
多うと作る所しらひの様のとて

後頬附

もよすとおまほのいさまをあつすがれがれ

永久二年正月 月

承
みのそくわやくすまうとおひはり

付實附

まよすや筋の山下わづり

月

三毛ひよとむすびよ

源憲

三間半

まよすたよの山下とよもよと二軒うち

藤原足房

あまとてあくす本多種すひあくす時

月

百丈沙翁歎

七角口

まよすとせんじよ山下のとよもよの

夏月、歎立中

藤原足房

れとく通の下りせんねんからひのとよや人車了

宿題

信實附

後高柳捕取

人車あればしとくとまわらとあらわす

十類百丈

西蒙

あらわしとまわらとあらわす

月

未満

十頃豆

家

宿子^{すくね}の元代^{もと}から月の桂^ケが生^いんで

猫

内

床^{ゆか}に所

あまくは本^{ほん}をあらわす猫の毛皮^けを表す

守節亭

原作

江集

た山^{たさん}花^{はな}集

おの^ののや角^{つの}よあわゆる猫の毛皮^けを表す
はあ^{はあ}と三條の太尾^{おおお}天后^{てんご}守^{もり}やあと
そく^{そく}ののまつらむけりしとく
キ^キうきのむかとよづとくひづ

裕

十頃豆

床^{ゆか}に所

人^{ひと}まくわすきをもちよ^よゆき^{ゆき}うは^{うは}すれ

開

後^ご京^き移^い換^か

ねのまくわすりあらわすとある床^{ゆか}の風^{かぜ}

家集月^{かしき}とすと

俊^{しゅん}頃^ご明^{めい}

やのじまわらふとし風^{かぜ}とらつ月の夜^よ行^ゆま

夏^{なつ}も

ちあわせに

き社^{きしゃ}のああ^あきくの神^{かみ}まづくすをほな
世^よのよすわらわある風^{かぜ}とらつまづかわらと

六
詭
之
事
本

卷之三

龍
さうの図の原本
お家
（新）
（元）

千五百善行錄

卷之三

ちうのいのいわ、住顎といふとあまくさ
達也、おもてけん、衣をゆく下

是也、此是詩也、此是歌也

御子の石のさ

利子と佐野の石龜万葉三代坐す。

足利義満の文選

子之才思之力，若得小僕與其的
而但以井蛙之智，取它石蟲之計，仍不
事

家集
かし

行云行絕

志士不獨有之而天下無之者以之為誠之謂也

卷之四

六月
始頭

まくわがやうふをゆき
甲志算

行云三
少不以善之爲也水汀乃龍
日
乞發用

丁乃龜

1

日
河
東
夏
秋

七言律詩

卷之二

○
長
加
假
人
武
店

有作之行

二際才詠之
江上一悲窮
河窮一萬代

屏風元の禁中（元の）の家（はう）まで
元真（もとまこと）

久安百々長

舊者也

牛河とつばとくとし龜のとひつとまわし
あらむのすき

酒のじと龜とくと 主敵

よてゆきとれかとあひゆきいよつとくわざれ
文治二年百々又一服 龜值淨末孔守は文

定家

さうあれのかねがす本にげてつたとせきよ

貝

十集月あきと見下すかとさう

花山院抄

かみまよをくえとまくは月を夜のゆきも

讀人ちす

五

内八十二内和音浦上神山ひづく鳥音ひづく神山ひづく神山ひづく神山ひづく神山ひづく

貝伊集

玄真

忘貞ひづくうよとくのくえてわる宿子すか
内事事中内
ワシと貞うせりやひづくと告ぐるはとく内
建長三年之正月 順住院

元のえりがふるはるひつと貞うすか
ヤクシとくとやひづくと告ぐるはとく内

里

白はれう二修の忘貞人中まもれ我早す地也

後

題後

至
水底のむすますもうごひめわく事のまこと

内 あもし貝

内

せのひはれをみたまつてあもし貝の度

新鶴巣

文治六〇五社百

俊頼

ほげつひるいもあもし貝、やまと夢のいと
櫻貝内裏の見合人

西行

胸内をなぞにほんわく櫻ひよろびにの

内 二三

内

歌ひきさきのむすめくわくしますよめ

内 けでし

内

はあよ衣のうみ袖見をきのひゆべとねぐま

内 まかし

内

ゑのき壁のよしもれい風すずすよまじ

内 すめ貝

内

以 ひすい 竹のうちのくじ見まくせよあひ

内 すみすみ

内

きすすむちのくじ見ひくじ見ひくじ見

内 ほにて せひ

大仰に頼

うすあらはるのくじ見あらすやくまくわく
梅貨人ひくじ見とひくじ見

俊頼

鶴巣

春風はやけんそくまく難乃海の梅の花販

新五事之序 六帖類

名家

何かよどき書

ヒトヌルモナシモモカタヒムカヒト

アヤシムシテアキハラヒミツテヨリサシヒタ

内 宿實

アヤシムシテアキハラヒミツテヨリサシヒタ
建長寺ニ引ひて家子テ出家 貞

和泉守浦

トヲタマシケの由貞トシテヨリス内

長久元年六月良内朝モ家子人、キサ

ちきのひ

トシテヨリス

アヤシムシテアキハラヒミツテヨリサシヒタ

内 宿實

永萬二月五月往來、行々處

嘉祐丙子年
五月既望白日

もとをせし城上をいへくを自のまことあつてふ

達保ニセシ正久

藤原原志

セトモヤマミの浦あか一月もと月と約すてま

建久元良川寺家行んやう

もとみゆくよしゆくよしゆくよしゆくよしゆくよし

鶴牛

百とある

かの門院は執

家とおひつをまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

十頭百と

本きばぬ

牛の角とすのとすのとすのとすのとすのとすの

のとすのとすのとすのとすのとすのとすのとすの

永仁ニシテ相て家と云水す中

藤原為頭

家とすのとすのとすのとすのとすのとすのとすの

のとすのとすのとすのとすのとすのとすのとすの

精於

正治ニシテ皆

後鳥羽行所製

春雨のがくとそわすとすとすとすとすとすと

百ての精於

順田院門

かきうる氣付くとすとすとすとすとすとすと

衣と因下

六帖題

父のれ入むけうすすすよきまよ幸運

春日社

藤原隆裕

まうすよひの壁の正廟やすりうらわりあ

判六

列六

行六

芝後附

ありありゆれよとしもあきれまうかの十

建寺、官署中は下實作

かきうみえらんれんも無事中すたまくわゆう

三百六十石

為家中

まろ野の野やおと通入り日氣のよきがまう

十頃中

麻籠中

暮れりありも無被中すまつて行へや内

本懐中

俊頼中

三月の朝より火中がまのうとうと無事中す

晴虹中

火中

一望中の火中がまのうとうと無事中す

家集

和泉部

思中れあれの宿中まくい所中めいき中の内中一中まくい
カ中。神中くよのしま中あむもうち中て見中すすり中の内中

宝治二年正月

家中

秋中きて風中吹中いさくのうとあ中あきくか中お

十頃中

後高橋捕政中

朝端中り紙中の事中がともと内中きりのうとおせ

月章中

家中

月中の事中朝端中がともと内中きりのうとおせ
陰暗中もと中と中小ち中かく中のこもすれ我中の事中
嘉中年中事中を中す中あて中だらけ中の事中

六船記 誓文

萬葉集 誓文

内
内

吉、新

信實御下 徒牛車

新

内
内

吉、新

内
内

吉、新

内
内

吉、新

百首三

西山人

天のあまきく雨をけく玉乃あまくはくよひ

家集ねの木とくのいきくろと病のとれとみれ

共通和承式部

ちのや翁の病とくのまくわくのゆきくら

くもつちばせきと能用に筋

くよのくよむじゆと白かくすと

百首二
百首二

家信

文治三年百首

家信

萬葉集とくの帶方とくの葉吹きもくの葉吹き

十個百首

後高柳捕取

我窓の葉吹きの葉吹きとくの葉吹き

西治ニ百首

家信

二の葉の葉吹きの葉吹きとくの葉吹き

家信

秋の野とくの葉吹きの葉吹きとくの葉吹き

家集春之年

弓の葉とくの葉吹きの葉吹きとくの葉吹き

弓の葉とくの葉吹きの葉吹きとくの葉吹き

法輪百て生

源仲画

家集薄招蝶
かのじゆふとまく尾をとひぬよしとく言ひ林をとむ蝶門

蝙蝠

家集

和泉式部

じ次

鷺遊化飛吸
翁遊人ふ草
えりかに
ひきはる
春原直信題
じしき鳥せり鳥う
ほんがはねにとひん
てめれ
かへり

人あき鳥すとん島にとこあらやりも君いのん

やさす人のわ遊をとくかうて麻をさとくえ

内

兼土

わよえびへとまくととせばとこせづら

祐暉

スサナリ

かのじゆふとまく尾をとひぬよしとく言ひ林をとむ蝶門

家集薄招蝶

祐暉家集

原仲山

えのじゆふとまく尾をとひぬよしとく言ひ林をとむ蝶門

家集柳

かのじゆふとまく尾をとひぬよしとく言ひ林をとむ蝶門

和泉式部

かのじゆふとまく尾をとひぬよしとく言ひ林をとむ蝶門

十頃見

後高村捕政

かのじゆふとまく尾をとひぬよしとく言ひ林をとむ蝶門

内

空家

かのじゆふとまく尾をとひぬよしとく言ひ林をとむ蝶門

内

麻籠付一

癸未年正月廿二日志

新元
元日

宝治ニ正月寄思惠

初家

カセニシニシテモ風の音止むく、あらかね

守宮

十頃

床並は所

アヨリシシナガの松の木立、竹のつゝき

百葉

中即門也

朴垣やいがれ新緑とすすむ外もいがれや有

建保室也内裏にて行

二條院讚波

三三ひ井のやの跡をまよひ人のひのあせはう御

六帖額

初家

博物志

あそびに山のいのうを年事井をもせが年事

刊

海月

家集高麗

原付

我急そまづ月をうけたまひてわざわざ

海毛

老人

内

いよとくはせばまほもひひのとづきをつかまひ

蟹

芦向雪

うとうとくはせばまほもひひのとづきをつかまひ

三鴻社奉納年神示傳

元

日

めのめのかり田舎者よしむけいひうすまほもひ

權傳四分錄

下

奥

六帖類は六通

中勢、越

ああさうとおはいのうと入へうだるをもじひきかく

椎曾家云胡

内

小車アカあよ水アシのまくよひきすうとい我アタマう

信實助アシハシヤウ

正三佐助

内

うめうめのまく水アシありありうめうめ

為家アシハシ

長河ナガハシせとの水アシもじ風アシのせぬくらさんちゆう

高平中

家代アシハシ

高美タカミのまの入アシ住萬アシのまかつまもうち萬アシ也

内

家アシハシ

甲山カミヤマのすやせしを河アシせくもつ方アシのまく

新六三

家集アシハシくらむ調アシくへりせきとアシせきとアシせきとアシ

和琴アシハシ武部

迷懷アシハシ百

俊頼アシハシ印

にうきまのアシよ月アシのやくはくあんじのねと

けうて因アシエ印アシくまアシの入アシ月アシうて魚アシ

あすくわくそくそくそく

鰐

六船郎

初家アシハシ

母アシのてのほのつま鰐アシをつまませやま

内

三まよひの處の内新せよ望のまし此處新の

信實印新 + 信印新

内

小舟新よまてひまよけにわのあはせりえや

家集

西山二人

宇治河新やア風新めらきよも舟の下まくばる駕新も

内

原仲新也

かみい駕新もあね新よせうくやのとすすきすす

駕

衣裳新ゆふ

衣裳大伴新前六三
子キ
貧冬新ヨウ

迷宿新トシカ文記新宿傳新

又セ聲新か軍文集新事ニ志

眼新ト書新出新未新トシ

内

六帖題

よひよそが新か氣新つ新やまはすすみの内新

之後印新

内

古貨新浦新すまう駕新とあるもく在新よまてきくは義

和家新

行義新

内

や川新よも下新は駕新の下新の氣新もくま乃母新や

檀僧新云

内

望新まくほ新まよせん行新じや骨新も駕新とく也

駕

万六集

顎新す駕新

師大伴新

江名集

江名集新

俊賴印新

榮華雜

江名集新

俊賴印新

内

ちよよ小船新のまくほくせりやまけ新一毛新李

西行印新

家集新

西行印新

六帖類

六帖類

卷之二

かわらへせむはすと黙りて種や
うなづかう

内
卷之四

東ノリハのシテヤキノリスモシタム

卷之三

三月の朝にわが子にせんじかくも水元の生
信實_{トシマツ}行_{ハシム}五

あくまくひかるかて紫あやめすみれかじ

卷之三

信頃新
行空

卷之三

夜までとどやよそみて山のむかへあゆまちあら
春門内木に春乃ひさか山庄よりかほひおとよ
新くら川のいの住まわる都へ云わむあら

卷六

第六三魚六中規

六月六日
本家同人
发夏月

作東記

卷之三

家集本

おどろいた。あらわせは、その國の風氣である。

卷之三

六帖類

まわ海のひよく御の在り所へと往かうけの事

卷之二

卷之三

仲東記

四

信頃印

卷之三

の事も書けねえ(洒落) お子さん

1

人也。一色
之氣，以能
之氣，以能
之氣，以能

卷之三

三百六十六

三
一
二

氣

あすとあいの湯
燭

水經注

卷之三

新六三
信實印
印信
之主也。信實印也。信實印也。

卷之三

日下
ノ
新之
奏了三十
老後那

卷之三

卷之三

卷之三

御子の御神事

家集序

西行上人

林氏はすまきつゆく あらうのひそかにとおもふをひく
家集ごときと うまくいふ筆

朱子語類卷之三十一

俊頬游

家集
卷一
詩
江行
其一
江行
其二

永元五年夏四月
神祇伯邵仲心

多一の溝出の事の如き
王事の如き

あくの事は御用事と申す。おととしの秋の秋

三

聖武天皇

萬
方
二
作
者
不
詳
本
卷
中
所
載
之
文
字
皆
為
古
文
其
書
寫
法
亦
有
古
風
其
中
多
有
古
文
之
形
象
可
以
考
證
古
文
之
形
象

まきつゝをすの浦へかへり
おもかき
十三(13)
一

卷之三

三月廿二日
晴

△六百九十一

別異

支本和歌抄卷第廿八

雜音却十

題

竹

條

葛

草

日薦草

山板

淺茅

茅花

蔓

鞭草

蘆

海松

藻

蕪

思草恩草

亡草

万代草

白慈草

余古草

米

菅

濱木綿 小妻

藍

紫

麻

淺砂

土筆

水苔

母子草

射干

折敷草

鏡草

夕陰草

莎草

芝

芭蕉

莫鳴草

萍

向草

和布

主向草

莞草

駒繫大草

目覺草

目覺草

一
草

入道精舍中賀屏風

後漢書

此卷之印皆下落于某人之手。不知其人何似。

添順家馬毛若干

の筆乃物とて、此を筆者本名もあらず。前二句は

障子絵

水東

卷之三

葉門
黑乃赤と子雲
法印素庵

家臣せうにの仕事しご

卷之三

家集

信宿
信宿
信宿

家集卷之新
萬葉のそれ、又
高麗の事
うふくは

不
原而質鄉

唐書
やうやうらちやをめぐるんじゆのままで霜林也

高麗

慈慎和尚

百丈山初モ

前りあんまと

従二位家尚

千五百番行人

事中綱家家

去る行人

霜の葉に

竹

千五百番行人

小侍行

三行人

千人

萬五千番行人

千人

梅行人

千人

竹

海道も富次

為相

山すき杉のしきと吹きく林

竹の下内

正治二年百ては

後鳥羽行内

雪川も有ひ内月を

吹きて波の竹の下内

貞應三年百ては

為家

而より経行のむきつゝく水の下内

竹の下内

百ては

老後行内

いよぎの行方をねくや行のまづかと

衣冠内

高麗六帖頃

家集法文

殷西院大輔

いよぎの行方をねくや行のまづかと

衣冠内

高麗六帖頃

家集の(五)

節度

六傳院宣

竹の葉よが竹衣れあらうい席御坐つもひき竹下

春日社百首

隆祐辨下

竹の葉よれと翠す

二夜百て(五)百

後高野措政

君の下は虎、神聖人よりとれん竹の林へ師とゆく
旅宿みてひと竹の下道旁ニシテ毎夜不思議の月影

家長辨下(五)吉日吉社竹問寺

家院

神板やまへ竹よ下山内へりかづれをひき竹
百て(五)百のきり勢國の竹の下かくもさのすとく月影

宝治二年夏月行 家集百下

内嘆の竹の葉よくねの叶(ハ)の葉(ハ)の葉(ハ)

内

ほ(古)

四邊

家

古

竹の葉よ被(は)はるか衣(い)ふの上(の)ノ

百て(五)

家院

古

もよすが竹の葉よ被(は)はるか衣(い)ふの上(の)ノ

百て(五)葉(は)はるか衣(い)ふの上(の)ノ

仲實辨下

古

竹の葉よ被(は)はるか衣(い)ふの上(の)ノ

百て(五)葉(は)はるか衣(い)ふの上(の)ノ

家集行の下(の)ノ

古

也(イ)あひじよへかまくと竹の下(の)ノ

大口辨下

古

也(イ)あひじよへかまくと竹の下(の)ノ

正(マサ)辨下

古

也(イ)あひじよへかまくと竹の下(の)ノ

正(マサ)辨下

卷之二
六帖類

卷之三

刊脱

文應元至社早

卷之三

之御子也。此君之子也。此君之子也。

江長元集

後漢書

卷之三

宝川一筆
かくしゆもじよかきとひめいあくすき

六月廿日
宝治二年夏月
里行

卷之二

年少の頃は、おもむくかわいがれていた。おまけに、おまかせの手紙を書くのが、おもしろい。おまかせの手紙を書くのが、おもしろい。

卷之三

卷之三

十五日正月
吉

卷之三

おおきな雨がふる
おおきな雨がふる
おおきな雨がふる
おおきな雨がふる
おおきな雨がふる

文治二年正月廿四日

卷之三

夙夜不休。丁未之日，余與子雲、子房、子房之子子房，同往拜謁。

弘文

常寧州志

まくのとくにあらわす

三島社

植得山云

山家
内閣摺政家事。常聰升入道大政奉
かまこしのうけんじゆくやくあつまやまひやこす。仰
長承三月七月常聰升アキラ土番行々竹内勝原

方志考文
卷之三

卷之二

1

卷之六

卷之三

賀州志

卷之三

一

丁巳長二月
着言一月

安義院之碑

千
之
上

水家

建仁元年夏六月朔丙子
老君立于首善之山

後漢書

手のうをあくびてひ行の一反をうねそなへ
六時正
故あくびをすがまうのあくびあくびあくび

二

逮及七年而朝之家子之詩也

芝後編

卷之三

別妻詩

此中人語曰
吾聞之
昔者秦王
欲攻魏
魏王使
張良問
良曰
王之欲
攻魏
非計也

保安也。法性入道前開自家行處。對內

卷之三

安六
安嘉門行子陳

あめやうへぬとまひ日暮ゆく谷のきぬよはね白雪

文永元年每岁之中
为家以

七
年
四
月
立
丁
巳
午

家集卷之三

日向守不^新ニシテ一ノ事也。其事也。其事也。

江都縣志

卷之三

也。故其子曰：「吾父之子，亦猶吾子也。」

筆者
筆者
自記

はるかに下りて日暮れたりて

至行之時也

四

家集

卷之三

中集既惠，漫存草下。

卷之三

卷之三

建保七年家千の言
元大納言源氏

小學文庫

後漢書

の葉はやへ霜れ、木の葉は
變成て木

卷之三

卷之三

後九陰以下

四

十一

内
の
本
室
内
下

15

卷之三

筆あら。衣乃中主は計ひのまほのあわせよ。

二

13
支那の政治家は、必ず、その政治家としての立場を明確にし、その立場から行動する。たゞ、その立場が、必ずしも、その政治家個人の立場とは、必ずしも、一致しない。たゞ、その立場が、必ずしも、その政治家個人の立場とは、必ずしも、一致しない。

513

卷之二

四

皇清鑒
卷之三
庚子仲夏
王氏

三

病状の小さなうみやせをもつては、おまかで

09

實之大增也。是而
亦可謂之大成也。曉生
可謂達人矣。自之深大
矣。

2

正治二年五月

正治二年五月

五代の内に引合のとを用ひてもいあつてはなづかす事

千五百番行合

具親附

行合あつてはるべくの儀行合と無日が有り

百三十

慈鎮和尙

五代の内に引合のとを用ひてもいあつてはなづかす事

家集さん

俊頼附

山川内に引合のとを用ひてもいあつてはなづかす事

上

六帖引

新

山川内に引合のとを用ひてもいあつてはなづかす事

下

信實引

新

内
内
内
内
内

内
内
内
内
内

萬草木雜木劫將就草字手部入一

家集序元ニヨリ每ニテカ

民部アモ家

千五百番行合

家長附

行合あつてはるべくの儀行合と無日が有り

大寺と云主基方古屏内

吉川、永興

行合あつてはるべくの儀行合と無日が有り

あやめと

ト部 宣直

千代歩行家の内に引合のとを用ひてはなづかす事

宣葉

前題

正二住家

元

いと新書

又はさすまん出でまへつてうへゆるのやと

昔

延長五年屏風

貞之

三事多くれわづかの久よをあくへてわゆ

内

延長五年屏風

躬恒

千代年ねこきよをひのとまく歌ふ

金

延長五年屏風

千代年ねこきよをひのとまく歌ふ

躬恒

五事

延長五年屏風

千代年ねこきよをひのとまく歌ふ

躬恒

新

延長五年屏風

千代年ねこきよをひのとまく歌ふ

躬恒

千代年ねこきよをひのとまく歌ふ

延長五年屏風

千代年ねこきよをひのとまく歌ふ

躬恒

之のむかし行ひてより二輪の車と並んで
保安二年九月四日家子人良秀

保安二年九月由下家行乞臨縣
暮後

卷之二

岩の上へ一升の水をくわえて早く舟を下さり

永久元年 七月廿六日 今夜若
之二三之

徐二先生詩

居候の事は御心配な事無
御心配な事無
御心配な事無

卷之三

おまかせの事は、おまかせの事だ。
おまかせの事は、おまかせの事だ。

卷之三

卷之三

事。同人。此中也。其事。同人。此中也。

寶治二年四月廿日

後序

卷之二

宋史卷六

5

卷之三

民部一考家

日華草

六帖類

日向本門寺

新成書

新古今
に
志摩
はまやまとくわいたよあへたはまのせふ

四百五十九

百丈院

慈祐和尚

法のうをせぬかおじておまきもとむりがまな

と五
まな

徳智
ひき
ひき

行三佐行経

徳智
ひき
ひき

我富乃メケホホ白翁乃けゆは

中納家持

中納家持

題「」す。正三佐家持

我富乃メケホホ白翁乃けゆは

後二佐家持

山板

人名

山板のワタナハトモア山板の山板もをかんとす

日

けのこりのちあつても山板もはよつて

柳吉
金五元

門の山板乃色もとくがひつまつてあ

負應三年

民詔てわ家

岩下の山板もとくがひつまつてあ

正三位

わ家

山板の山板乃色もとくがひつまつて

信實

惟作

岩下の山板の山板の山板の山板の山板

ぼ茅

題「」

もとく

万平 我寫乃ぼ筆を以てすましの筆をもとめし
日月 すのあみをつゝましのうむべに時有りて
七
ト

日

穂積宣子

秋木まき皆ぬへり 我寫乃ぼ筆をもとめし

穂積宣子

時も

郭公たまくとお竹林 わづけともやまとす

家集草元董川

後醍醐天皇

宿所はれよとやくぬきすりまく

家集

其後

秋木まき皆ぬへり 我寫乃ぼ筆をもとめし

日

赤人

いふるのほりとくまきぬけまくをひぐ

ト

下
手

負應三事とす
氏説ての家

さうくわせよひいあがのぼりとくまくをひぐ

三言

名思

秋木

後醍醐天皇

秋木まき皆ぬへり 我寫乃ぼ筆をもとめし

前番行々萬

床毛け

あせうをのむとあわせれのてつらへて

内行攝聲音

支那音入行攝聲

すなむとが乃ぼ筆をもとめし

承應元年、月清浦下家十番行へ

源雅重印

後刊不審

みりすかまのとれをへ南あくらを唐を

文集日記

宿すしりやせん葉あくらに秋の夜を

慈法和尚

宿じりが、是の夜并原あくらにて内をみる

はす、文集日記、黄葉思

秋

頭秋日晚、若行願下

寒月伝とすよと

嘉元二年十月行園

赤竹力相

あすくこまく原の夜並まきけ、竹の音

帖號はす、中勢、朝

まゆあらが、もく水をとせん葉あくら精

日記

まち野のぼり、とおもふくせん葉あくら

文應元年社日

日記、の家

秋月すすり、キヌマツ野の夜あくら

文永十二年一月

いねの高葉あくら、あらのすすり

文應二年毎一月

内

木はくやとく南あくらのそ枝、あまほうとせん葉あくら

内行精改家

あ中紀家

いねの木はくや、あうし、ちひ、跡すすりせん葉あくら

モト大の森
寛延二年
之南水門築成

百てあら

式内歌

35年
あきとけり代見の里おまめ原しすれ都の神下

旅

35年

達保ニテモ正月

正月の家へ

むづかはま野をつくやうやくもの衣うへひと

日

僧を行き

あくふはまのあまきよくすの成すうせす
家集せでまく又云 徒二位家後

けむら山メタがくねま共をつまめやめのひと

弟たし

六帖

民部てか家へ

列三六

さにのるかわらのあままつらまつらの又言

あやゆみ悲人

日

日暮くれすま山内やくひつるひまくわから

君にあらん

日

あきやるもすのそよすまくつらやゆくまく

六帖

さく

さくよこえよまかじゆくまくつらゆくまく

家集三三字

家

まくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

ト

六帖

家

まくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

ト

六帖

家

まくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

ト

六帖

家

まくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

ト

六帖

家

まくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

夢

正始印

卷之三

もうまめのまよをあきらめかうといふ

同上

父すこちの山へもくせんけふあらすき
かく
六帖ひきわく 五三にわく
むすびたはくわくわくわくわくわく
延保ニ西向左家吉

卷之二

後漢書

四月廿九日
晴

父の死後、毎年一月、民部の家へ
千鶴子がお参りになつてお詫びを述べ
お見舞いをすまね。宿泊の日は、ゆうくひの内

文部省
第一種 民族教育
六帖題名 卷之二 中華文明

三
山本のあさくら

萬千万千
古川古川
小高小高
下川下川

うるわしい。まことに、
ちい

劉六云
六幅足

ニキシホのアラミテナリタマニハ
ヨシトシヨロコビテ
トモヒサシタマニハ
ヨシトシヨロコビテ
トモヒサシタマニハ
ヨシトシヨロコビテ

寛元三月結嫁經日 民部^{アカ}家

五日未^タ申^タす^タまつて^タや^タの生^タ付^タる^タ日

鞍^タ

迷^タ轡^タ

後^タ轡^タ引^タ

紫^タの^タう^タひ^タわ^タせ^タも^タつ^タじ^タけ^タう^タせ^タす^タ

六^タ轡^タ

後^タ轡^タ引^タ

金^タ腰^タ或^タ若^タ詠^タ葉時^タ

家集^タて^タ事^タ夷^タの^タ見^タ

神祇^タ伯^タ仲^タ之^タ

あ^タひ^タの^タす^タよ^タつ^タも^タつ^タう^タく^タれ^タわ^タな^タの^タ意^タ

文^タ永^タて^タ口^タ無^タ一^タア

民^タア^タカ^タ家^タ

と^タも^タ下^タを^タも^タつ^タう^タそ^タき^タ世^タト^タ今^タ見^タ

内^タ

翠^タよ^タあ^タ城^タ山^タ不^タ可^タう^タう^タつ^タて^タシ^タ出^タり^タす^タ

家集^タ古^タ今^タ而^タ争^タ

後^タ二^タ位^タ家^タ也^タ

谷^タせ^タき^タま^タつ^タる^タ事^タも^タつ^タら^タ系^タめ^タて^タす

百^タて^タあ^タう^タ

後^タ鳥^タ羽^タ行^タ繕^タ

日^タよ^タて^タち^タ引^タ子^タゆ^タも^タつ^タら^タ之^タも^タい^タ人^タお^タ此^タ車^タみ^タい^タ

民^タ詔^タ家^タ

六^タ轡^タ

衣^タ金^タ肉^タ下^タ

水^タり^タも^タす^タと^タの^タも^タつ^タる^タ急^タき^タも^タい^タ手^タす^タば^タる^タ

お^タか^タき^タと^タの^タも^タり^タつ^タら^タ急^タき^タも^タい^タ手^タす^タば^タる^タ

内^タ

家集^タ寒^タま^タ

あ^タか^タひ^タを^タめ^タつ^タら^タう^タま^タて^タ二^タの^タ引^タく^タ、^タ切^タ

深^タ仲^タ

永久三年百々餘卷

藤本房

雪までぬれ、木の山のあいへ、うるそくしむれをまく
紫不_{シナ}根_ル六
かのあらはすもほんとおおきに通じてわが金

百百_ヒ守山

藤_原原

まつりとけり、人をかし山の下ふり、あらそひに

蘆

家集毎ロ_ヒ中 民報_ハ家

わがまみのあらはすもほんとおおきに通じてわが金
世屋入道_{シヤウジ}改家_{カイガ}貞_{ジン}惠_{エイ}
まくやひくおねうつらうわくうなまうさうう内
あらはすもほんとおおきに通じてわが金
延長_{エンジョ}五年_ゴ一月_{イチ}日_ヒ改_ハ家_カ貞_{ジン}惠_{エイ}
いとまくやひくおねうつらうわくうなまうさうう内
れづかのゆゑのれざてさかうう内_ヒや乃池_ハ内

延長元年百_ヒ

市大納_{シタナ}太_タ氏_シ

もろの湊_{シマ}のもよのまきに

む(五) 市大納_{シタナ}太_タ氏_シ

延保三年内大_ナ家_カ百_ヒ水_ミて寒_ク蘆

後二住家_カ管_ム

大井河入_ヒのまくらのまくらのうとえまくらのせ

謹_{シテ}半_ハう_シ相_シ羞_シ

接_{シテ}役_ハ貢_シ平_ヒ

大井河を坐_スて芦_ハ冬_モ移_シるのまくらのまくら

接_{シテ}院_ハ財_ハ百_ヒ

接_{シテ}大_ナ河_ハ資_シ心_ハ

霜_ハ秋_モのうとえまくらのまくら

大_ナ河_ハ相_シ貢_シ心_ハ

はのまくらの浦_ハ吹_シら_シまくら_ハのまくらをす

貞永_{シテ}早_ハ秋_モ

因_ハ改_ハ改_ハ

あけくみぢやくは病のむすをさきお間まにせよまうす

家集水過蘆葉

此程多入歌季

又トセ、あひ歌ようすをうかひたとく

吾江の舟

百丈弓

おの内弓内弓天馬弓もゆまなすいを漏もる所所にむすべ

冲集

中勢勢之

家集同

小古

好是

山川ゆきまのあやれ山川白雲がすまするすままつまわ
ゆきわいのほろじぎの程度をまつまつ事事ひまづらう

忘忘か人人よしや

元真

あけじ家落落月はまきといのまむせんとう

百丈弓水

俊頼同

志不見見のす一節節下下あむひつかりひつかりのすを母母をまつ

模大師同

賣家家

おふすらすの浦浦あれのあやこあせあせきまつててと

紫紫川川のほのぼてりよがの安安の都都（ゆくねむら）

頃頃はりーとづりとづり

百丈弓

順流順行行萬葉

キマテミアムシムシねん年乃萬萬とがれれとし三三の舟

家集同

俊頼同

すゝき小舟舟のあはりよ月月やうそくめおが同あら

永保三年十月

逃逃内被被家家人人、蓋蓋也

源頼經同

もくよきせし布にてうそにのうの不す有る

素應ニシテ集善社ノ体験 上高野下

とくにうきわひの事もあらざりてうれのう

貞應ニシテ

民歌てか家

夏刈乃弟のまつたえのうえくくゆううそすく雪
人あらはれにせつまよきのまきくしづか

内

年一子二子三子四子五子六子七子八子九子

達保ニシテ

行二位能手

ほのめくめこねうじまくわうのれをうのれを

義安ニシテ廣田社ニシテ

明望判セ久松

初經

正三位知家

内

夏刈乃弟のまつたえのうえくくゆううそすく雪

人あらはれにせつまよきのまきくしづか

初經

おまつまちやうてあまくひはう乃多のうのうきくう

承保元年九月

秋月

蘆じ藤惟信

三よし小いきうどする白駒

右因ちわ

達

みさき

吉

千五百番行人

法橋風照

おまつまちやうてあまくひはう乃多のうのうきくう

内

おまつまちやうてあまくひはう乃多のうのうきくう

正治二年夏

後藤精政

おまつまちやうてあまくひはう乃多のうのうきくう

文

應元年七月

社日之寒蘆

民部の力家

多き事へたむけよてくがたひよひつよすすまゆ浦

延保ニ年内木本家見小卿実蘆

大蔵卿有家

ものうを入にまく水鳥のうき神代も霜柱

延安ニ正新桂野言日

安喜門口傳

ちく雪のくわくわく望み若乃をかくとまやまうと

題

凌あくの蘆内中ううむこすきがり、やせ、ハニのて」
家集
凌あく

舟

かどりて清舟はまきくめあく下せぬまよ

とも人

天歷卿集

香立集

香立集

かずはやあさくくふゆきいりくわふ神る手あづ

あきよあを重ねあせうう乃言すすつともか

一海松

一海松

首番行へ見事

いじらかあく残るまみのうきをすみとて無事

家集守海惠

俊頼卿

ちぬのうきみ。まつめのうきみ。
のうきみ。

幸次三昧人しの利本なし
志摩をもすの人の為類似

改むるをあらわす所へもくじを付ける

長寧
方言

二
けむりあくすたこえす三
もと
かわ
十
一
月
二
日
午
後
九
時
四
分
止

卷之三

卷之三

類
卷

卷之二

百七十

四
五九

卷之二

卷之三

九
一

新文安

卷之三

卷之二

卷之二

卷之二

志

文獻

文應元正七社

17

ひきのうめあひのうからあまとのをすすめゆくとあまん

六帖頬

正元

中勢

正元

「ふがく」人ひよそもてのうひくちかのまわら

處長、ひ旨と併せ

え後附

あはれふあはれへく住居のぬきすきをばくとて
襖子内就き家うへ池少一重残

差作

まの池よひへのわざすがあそもむかがねりく
ひくす

玉とうすがをとく裏手の野島、傳て母ばりをあ

長す

内

下に書の字の内に七箇所もすむとくせう

法士連カイシレン

内

家集高さ

貴之

二一、もととくあります河内にてあくまづん

六帖

三山こやまは實房のうちあけよまき、之てうき

着

題丁とす

内

ぬ、もととくみゆきうつしらすめいとせう

三百六十ノ中

好足

蛙をかて乃か、一よりひやもつてあすとくせう

六音音序人

後高柳摘改

ゆくまづまきとく安川とももじとせうのせう

家集右義の言ひたまへちまきあてま

和家
詩

すさひのまくわむら君とおまかせ、衣のうからん
裏ふゆ
相模

相傳

卷之三

アリテの事に付く事もあつた

今あらわ
多き事
れども

君まつとうゆかにすくふゆあわす
日暮えど方を
水の下

同上

民部の文記

山川之勢，則以爲天子之氣也。

卷六

信
重
九
十九のひにうよ

延保二年內裡古之詩後人或大改失之

同上

玉旅
内ニモ之不見可也。俊成ノ事
其もさうのまことに、さまで御神社居く

家集

西行上

がりのじつをまかねばあらまむれども
わざとせうけた

(卷)

萬
子

卷之三

卷之三

前中納言家之

文治元年正月
皇太后宣旨後咸以
為宜也遂之
此

我寫乃病二之三
也。也。也。也。

每章

民部文集

さう。ひよかりよどけ道すく。うれしの宿を尋ね
内
かへり。あやめを釣る。おもむの野鳥等をさうら。遊を
内
喜むのみ。そよぎのもよか。内
内
十五日齋行。如病得醫

卷之三

卷之二

身小のものも、一寸の大きさのものも、隨處に見
方毒ニモ義理御一家詳令判
かくよりがんとせんじゆう
政治二百年
前大納言太政大臣

卷之三

列女
六

卷之三

長元集

水經注

卷之三

三

卷一

卷之三

本居宣長著
かたのヨリ下
もくび

八月全へニ毒木ノ再集ニ
至トナリテモアガタノヨリ下
すモリ秋はニルモカナヨ
きりくし夜の道乃ニ泊ミシ都以西

四
四

秋葉市

人

たのへわくらうとおまじねて立ちよれやすす

山川院は時百々

仲實引

ひこれかや下さる恩の事も、二ひきともちや

建保三月八日吉

信實走て

喜野のゆきかみの山下の音おどしをす

四年四月家吉て

西二住家内

早う歌をまく霜村、まひまわらふを詠

内内裡は、鳴増示

日

家の席をもれぬまへんに廻くの宴すまは

建保元年も共にせよて侍、前半御一家

まち野やもくわづるむとぞ志のめぐもとす

正治二月仙洞は云枯野、霜

れ、病の色へりまきの字まひとく、早ば不内

内也百々

信實引

御身まく家のゆきはまひまくとぞ志の儀は

え玉院入道ニ下被す家幸て寄草急

後三位能家

いふ事もあらわの思ふ我の事くとぞ志の

母草

六帖頃

信實引

人をもじねのうへせぬくとぞ志の事もあらわ

母草

外書の年月は屏内

卷六

卷之二

六十五
伏羅上人書
伏羅上人書
伏羅上人書

卷之三

中酒書簡

正月の朝、お出でになつた。お出でになつた。お出でになつた。

建保寧
正

假
而
之
建
保
年
夏
中
大
雨
下
紹
之
于
之
未
之
不
忘
君
為
相

嘉元三色百々不降

未滅為根人

百代草

六百番譜ちゆひさん
人じん古いにしへ 様別よもべつ

六
中
記

前編
白慈草

卷之三

百事よりの事とすと
本多忠雅様へ
手あがきの事の如きもさうしておこう。自らわたく
永に元年也忽百々
原
すまひよめのつまみりありく。内々行はるからまへ

余許子

中興
元祐
元祐
元祐

王
卿
之
子

四
七

六、
新編
卷之二

卷一

百三

は爲頭目

アリスの手紙
正三位季經
丁度
アリスの手紙

千五百詩卷八

野客大記

正月の事は子の事の如きの如くに於て其の如き事

西園之大都亦有穿至千尺

行之以誠也。故曰：「吾從周。」

正治二年夏

卷之三

五工
猶

卷之三

內
平

內
說

同上

高
林

卷之三

家集高

三

四

乙未年夏月

卷之二

筑つてわやまうさんつのうちあるこそすむむかきつ
長弓

えふ思ひじりやまけよつて 中御衣持

延保五日月冬山霜 順法院中御

志郎王やまうの山ひそすをせれもてすおあらじ

頬

アヤセシシの山ひそすをあひと我わがまひす
あさみのよきつこすを神くわく詣でてもうもとまく

チテテ

祖部て力家

あさみのよきつこすを幸ひて極うて一やわい
ひきえひのあのもすばりまくわくあき神うまく

家集

後二住家院

ゆま河あらく山ひそすを幸ひて極うて一やわい

前頬

衣をゆか

新六九一正

山

明新

家

かがみのよきつこすを幸ひて極うて一やわい

内

山

あくま あかま

もく

壹

類

渠の上の神カミやあやしくなくてどうもえり

家集シテ申中

俊類ヒヨウ

セ

河神カワカミやかうカウさうサウアマキアマキセテセテテテ

人安ヒヤク

實清ヒツキ

セ

牛ウシあおがほアオガホのああアアわハよヨせセつツ翁

徐富ヒラフ

後庭コウジンち東

セ

立野タチノのわワ神カミく眷クニすスあアいイわワかカいイるルとトを

百丈ヒツヂ

高並タカヒロ

セ

あくまのわワトトれレはハとト熱ハリリすスめメを

文永ヒツヂ

民部ミンブや家カミ

セ

あとアト手ハてテ不ハ葉ハ乃ノそソ事シのノ次シのシひヒとトおオ山サン

十ヒツ九キウ百ヒヂ

小野コノのノよヨえエくクきキ野ノのノわハ不ハ葉ハよヨつツそソ山サン

も若ハタキてテ行ハム

前大納ヒツダウナ忠良チヨウリョウ

セ

も一ヒツはハ不ハ内ハタケあア杜ツあアさサりリ夜ハタケのノ海シマ

濱木綿ヒマツキ

人ヒト

十ヒツ頃ヒヨウ百ヒヂ

高並タカヒロ

まゆマユのノ望ハシマ翠スリをヲきキくクにニまマりリけケ和ハのノ波ハ

仁安二年二月清浦キントク御ミ家カミ行ハムたタ海シマ邊ヘン

資隆ヒツリョウ

三ミ田タのノ浦ハシマとトゆヒてテわハまマとトのノ家カミのノらラ陣ジン

此詩判官浦のまゆりにすくはらがねと
さとううちすせらまよりあとあいとあき
不、あさやうこくやゆもあき一かきほくよこ
約きじ霞とおひづま下を引けりてゆく
守りやあくねうりくぬーへわー絶え
乃度見へとゆつ内へ門大とさやうと
あれをうきて約すすくよくゆひくわ
ふきと本約すとせれと約女のかせ本す
羽せん時うわめうのうひそよんくわ
うえたゆふきとく

久安百首

待賢門院宮

あくゆうてうおまゆりとてうくとの葉と夢とふる
え後御ト

梅木浦おき
長いと内れバ
局小金子子子子
あらわすとゆうや
まきりとゆう
まきりとゆう

小妻

十頃百首

東道清

山うのじとひからくくめう衣の用とあとあき

西河竹村

仲實

月清あすか

外

いともおせうしとせううきとせう

藍

獨りす

とく

人をまやうとあすとせうが森のえにあき

百首沙可草

古伊門竹村

いともおせうしとせううきとせう

正三佐和家

とく

かくとすづみのあわのう

あもあくまうとせう

紅

類之子

卷之三

卷之三

類不

中納言家持△漢子

卷之三

麻八
高蓮陽春

癸未年三月寫於印廬

十一

新六九

六帖類

七

卷之三

麻

卷之十

桜あさはやかまちあいのうゆんもよき

文
卷之三

氏詠てお家

也あわせむらにかくも(アラシガタニイタマ)

十題百首

水滸

志は身を以て國を守る事に心を用ひよ
樹木を伐らざる事に心を用ひよ

人安百て
林義、行安
最當一はのちに之の萬事すと父兄乃も

卷之三

がりくやしあむよそでもまうらるいの本草よりあらう

正三位初家

丁巳年夏月
王之春書

卷之三

萍

卷之三

宝治二年夏
西三位家
人

西行の死後、年々其の筆跡が現れる。西行の死後、年々其の筆跡が現れる。

淺砂
從三位行家

信實耶

セ、之あへむ事は御のうがての御心哉。正三玄家

西三作家
日光

内
民部の内家

參
之
也
不
可
以
謂
之
參

内本
前
同
午
元
夜
衣
ア
ト

正三位初家

四

信實記

卷之二

後志明家書

水の上に立つておはすか
木の下に坐つておはすか

卷之三

三百六十中

卷之三

貞應三年百首
民部の家

おとこがまのめぐらと
速度は速
いのちも死をもへうがともあまく

芥

卷之三

卷之三

二
四

家集惠百子書

かくもへきのせりお通う事あつておれが子も

水經

卷之六

卷之三

同云

13

信實御後二年小
是
内

四

信實御
事

信實
ナミ

母子草

和泉守部

はるや家集え右義ひ野もとへあづてまと
よそへかづくまくゆきすと

馬繫

負應三日草女

民部一の家

も見しむる事にまことに
大玉草
ゑのこまとお、あらかわせくねと病のゆゑもと

同
大馬草

土紫

貞應三年四月草
大江

卷之三

莞草

清浦集

河東先生

家集
卷之三
射干

常水山人集

烈火
海草

民部へお家へ

卷之三

日付

内

支後御ト

さすうち也のまゝの神事のうちもこのとくもあ

さ

長三年内裡百野豪家

大河内氏

かみ地主跡をこまん春日守のわせとすとちむじ
いふ地主、帖類

民部内家

いふ地主をうちめどくあらててせきうせと

内

ちくきしむりのまゝ富クリく道のまよつせくわあら

内

二月、内裡の、まよつせくわあら

信實御ト

在在り

内

ひつひ内裡また一處その神事等、ニシテヨウセノ
口、もやの通内裡またまわり出くまつまつまわり

内

かみ地主のまよつせくわあら、まよつせくわあら

支後御ト

家集

あしきり地主がまよつせくわあら、まよつせくわあら

木民部内家

達保七年正月、内

前中納内家

山内川、またれ水をのひつ、あ(早)引(の)たそ

き保年正月、内

もや、が、もや、あ(の)らもすき(の)すま、メモラス

正三佐内家

内

家のかわらをすき(の)を神のわえよせろ内

權僧正元

いふうりへんうししかまのあせますよひちせき

日山ちさ

綱

わ・川・ま・れ・は・ま・く・ま・と・つ・て・ま・も・て・我・思・え

父薦草

万十

我寫のゆづまおもかのくわすにあひたるも

指拂草

万十

我寫のゆづまおもかのくわすにあひたるも

正治二年四月

三女郎

我寫のゆづまおもかのくわすにあひたるも

皇太子

廿九

さよあさくとものゆすは、うじあうもとすけ

「首番行人寄」刊元

麻葉に仰

はすやすく思ひよとばあくよとひよと
はすな方や、後拾遺もひまきよせくと
むゆれもとよきよまきよてゆくと右陳云
左すこよとよかとよきへば、利半候處て云
左すこよとよかとよきへば、利半候處て云
ありきよとよと

萬

正治二年四月

しむ集

式内教主

方後大雅上

かうもひとのわざれまくらうのれふ

内

正三位經家

あおとあけむくのうとくのうとくのう

あおとあけむくのうとくのうとくのう

建長三年 岳陽殿十三行ノ山家集

俊成

もくとお葉のうりよつわくをの草むらの林

家集

草書

もくとお葉のうりよつわくをの草むらの林

千向草

題

河島宣子

日以のよにわのよのうまくせまつてのふか

長弓

下がく山すくとわのよのうまくせまつてのふか
みしきまつてのりむりむくわきよこ

芭蕉

父安喜

新香城ねむ

林すくめすせんくとてわくふわくせんく

家集

西川上人

ぬすくあすやせりとせん葉のあまふとせよとせよ

正治二年夏

麻生はせ

さくくしまじまくわくとくとくとくとくとくとくとく

民部てか家

百足の虫をかず

いよすやうて蟹りとせん葉のあまふとせよとせよ

莫鳴葉

天仁三月二日附家詩へ寄衣

草書

もくとお葉のうりよつわくをの草むらの林

信州

千向草

幸ひる歌一百三十
刊ヨリ補フ

万土

おおだてのめりすれすれうるはづきてとまを連
内豈三六五合従二信行家

内

内豈三六五合従二信行家

信實印

いきよほくゆうすゑすゑすゑすゑすゑすゑすゑす
内豈三六五合従二信行家

和布

内豈三六五合従二信行家

正三信家

えきやうらんせ小舟を我らがやうすけうねる父さ

思地人

立

内豈三六五合従二信行家

立與川集

立綾波わ縫工

白波

内豈三六五合従二信行家

足和布

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

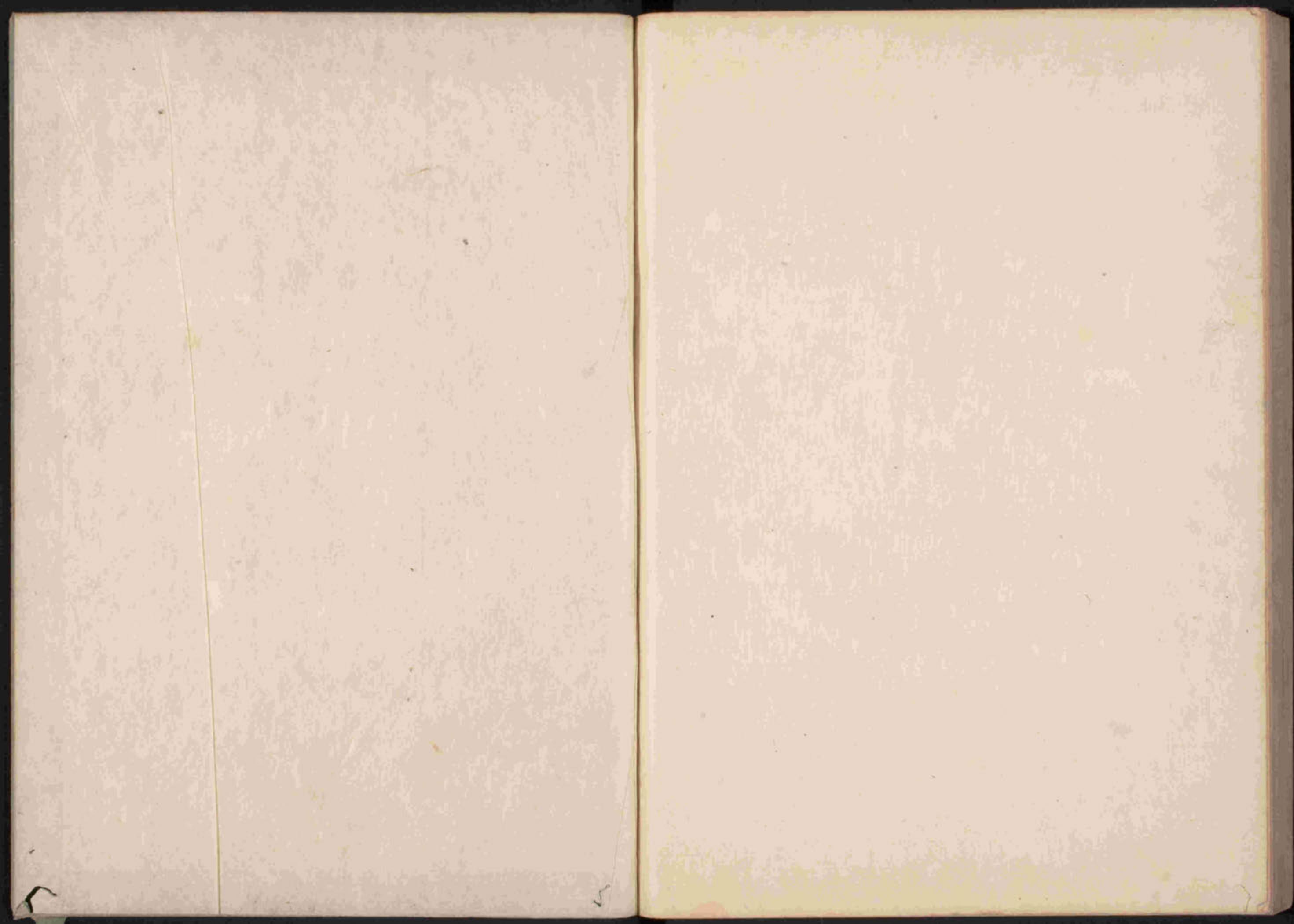
立

四百四十 長八 旋一

六三 内
九三 かくにふ神のいづくみ絶といふ事方主まくあよ
内のそこに万丸を辛口
内ふねこ
内は

寛永十一年

行持



110X
495
21